



赤い柿

永代美知代

「柿や柿や、林檎に柿に蜜柑は如何？」
 斯様おいしさうな聲で呼びながら、此頃はしきりに
 町を賣り歩きます。

まあちやんは柿が大好きですから堪りません。水菓
 子屋やかついで歩く籠の中の、綺麗な褪紅色のやうな
 美しい色の樽柿だの、赤いビードロのやうにすき通つ
 た修善寺の大きなつぐくたの、見るだけで最うおい
 しい水が口一杯湧いて來ます。

「まあ綺麗な柿！ おいしさうなこと！ あの樽柿の
 善い色つたら、どんなにしやきいしておいしから
 う。」

まあちやんは八百屋の店前にぼんやり立つて、若い

衆や小僧達が開けたての樽から、一つ／＼取り出して
 店頭に並べるのを、一生懸命いつまでも何時までも見
 入つて居て、つい學校の歸りを遅くなつて家に歸るこ
 ともありません。

「如何したの？ ひどく遅くなつて、どうかおしなの
 ぢやなくつて？」

母様が斯様お訊きになりますと、まあちやんは極り
 が悪くつて、赤い顔をしましたが、

「だつてね母様、あんまり柿が綺麗なんですもの、あ
 たしね、見てましたのよ、だつて、そいだつて……」
 母様は本當なら、まあちやんの食ひ辛抱なのをお叱
 りなさる筈なのですけれど、別にお小言も被仰いませ
 ん。だつてまあちやんは大の柿好きなんですもの。林
 檎もさう好きぢやありませんし、梨は嫌ひ、枇杷もい
 や、まあちやんは一年中柿のお話をして、一寸の暴風
 雨にも、もしかして折角澤山なつて居る柿が、みんな
 落ちてしまやしないかしらと、氣を揉む位です。

「大丈夫よまあちやん、幾ら甚い暴風雨だつて、あな

たの食べる位は大丈夫残るから。」

二百十日の後でも、あんまり氣を揉むものだから、

まあちやんは斯様云つて、家内中から笑はれました。

幾度かの暴風雨に、又しては落ちくした柿も、綺麗に色づいて、まあちやん一人の爲めどころか、日本

中の人がみんな食べたつて、中々食べきれない位澤山な出来で、毎日まあちやんのお家の前を賣り歩く柿屋の數だけだつて、どれくらゐあるか知れない程です。

「柿や柿や、林檎に柿に蜜柑は如何？」

いつもの年なら、すぐにも呼び込んで、まあちやんの大好きな樽柿だの、づくづくだの、母様からどつきり買つて頂くのですけれど、今年に限つて、まあちやんはまだ一つも柿を頂きません。

「子供に柿を食べさせてはなりませんぞ、柿位毒なものはない、昔から痢疾の原因は屹度柿だからねえ。」

丁度柿の實の色づく時分から逗留に被入つたお郷里のお祖母様は、何かの話の序には、屹度母様にお云ひ渡しになりました。

「本當に困るんですよ、まあちやんの柿好きつたらないんですよ。」

斯様云つて母様が、まあちやんの柿好きなお祖母様にお話して、そんなら一つ位は好いだらう、そんなに好きなものなら、澤山食べさへしなければ、別に大した障りもなからうから、とお許可して頂かうとお思ひになりました、お祖母様はやつぱり柿は毒だとはかり被仰います。

「まあちやんや、お前柿好きださうだけれど、柿はいけないよ、柿を食べるとききまつて痢疾になる。」

「痢疾つてなあに？ ねえお祖母様チブスのこと？」

「あゝチブスにもなれば、赤痢にもなるし、お腹をそこなつて大變だから、柿だけは食べない、其代り柿さへ食べなければ、お祖母様が御褒美に、いろいろおいしいお菓子をおあげる。」

まあちやんはお祖母様のお申付けですから仕方がありません、大好きな大好きな一年中折角たのしんでまつて、いまやつとおいしさうに熟した柿ですけれど、

食べないで我慢しようと思ひました。我慢するつもりですけれど、つい見ると欲しくなつて、口一杯おいしい水が湧いて來ます。学校の歸りに、つい八百屋の前

に立ち止まつておそくまで見て居ます。

「本當に私食ひ辛抱だわ、又こんな遅くまで見て居て、お家で叱れるかも知れない。」

何時ものやうに、まあちやんが心配しながら歸つて來ますと

「まあちやんや、好いものをあげませう、よく何時までも辛抱して居ました。其代りね、お祖母様には内證



ですよ。」

母様は茶の間の戸棚を開けて、大きな實無し柿を三つまで、まあちやんの手へお渡しになりました。

「あらまあ柿！ 母様々々、これあたしに下すつたの？」

「さうよ、田舎の伯母様からねえ、まあちやんにあげて下さいつて送つて下さつたの、伯母様の御家になつたんですよ。」

「まあ嬉しい。」

まあちやんはいきなり離れの方へ駆け出して、

「お祖母様々々、ちよいと好いもの、あたしねえ、母

様から好いものを頂いたのよ、ねえお祖母様、
何だか解つて？ 當て、御覽なさいよう。」

「さうかい、それはよかつたねえ、何だらうねえ、お祖母様には解らない。」

お祖母様はまあちやんが有頂天に喜んで居るのを、にこ／＼して御覽になつて居ます。

「あのね、これちよいと、解つて？ 赤いものよ、まあるいのよ。」

「何だらうねえ、赤くてまあるい、お祖母様には一寸と解らないねえ。」

「ホ、ホ、お祖母様、柿よ、けれどもお祖母様には内證なの。」

「何だねお祖母様には内證だなんて、お前それを此處で云つては駄目ぢやないか、ホ、ホ、よつほどの柿好きだよ、此の兒は。」

お祖母様は、別にお小言も被仰いませんでした。

—(完)—

